

コンソーシアム趣旨・計画説明

大阪大学D3センター・オープンサイエンス推進室 甲斐 尚人

関西地区のRDM人材育成を始めます

大阪大学を中心に発足し、京都大学の協力を得ながら、様々な講師陣が研究データ管理人材の育成を行います

企画・実行(大阪大学)

コンソーシアム会長



尾上 孝雄
理事・副学長

コンソーシアム統括



甲斐 尚人
D3センター 准教授
OS推進室

コンソーシアムコーディネーター



神崎 隼人
助教



前田 郁子
特任研究員



ヴルガリス ニコロオス
特任研究員



特任事務職員

コンソーシアム事務局

附属図書館(研究開発室)

協力(京都大学)



渥美 紀寿
情報環境機構 教授



小野 英理
情報環境機構 准教授

プログラム講師

国際動向・政策

研究公正・ELSI



大阪大学
古谷氏



大阪大学
榎本氏



京都薬科大学
田中氏



大阪大学
井出氏



大阪大学
吉賀氏



滋賀大学
戸廉氏



岐阜大学
清野氏



大阪大学
吉賀氏



ベルリン自由大学
Söring氏



大阪大学
野崎氏



日本国際学園大学
丸山氏

データスチュワード型
支援の設計と実践



アイントホーフェン
工科大 角南氏



大阪大学
甲斐氏

■ 関西地区の会員機関

優先的なプログラム参加、教材・資料のアーカイブ利用が可能。プログラム参加者のための旅費支援を行う予定

■ 関西地区以外

加盟歓迎、教材・資料のアーカイブ利用が可能。プログラム参加可(一部制限あり)

コンソーシアムは「学ぶ・共有する・つながる」場をつくります

コンソーシアムの役割: 関西地区の各機関が、それぞれの規模・資源・課題に応じて、各機関が自律的にRDM支援を設計するための「学習・共有・接続」の場をつくる

①	研修 プログラム	国際動向・政策、倫理・研究公正、技術、分野実践、支援実装を段階的に学び、 各機関における研究データ管理の課題を自律的に抽出可能なデータスチュワード型人材の育成 を行う。
②	教材・ 資料共有	各機関で再利用可能な教材、事例、説明資料を蓄積する。
③	事例共有	コミュニケーションツール等を活用し、相談対応、公開判断、DMP支援、基盤利用支援等の実践知を日常的に共有する。



この時間にご紹介します



研究データ管理支援
【事例報告 ①】

本日本お伝えすること:DS型人材とは何か、どう育成するか



データスチュワード(シップ)とはなにか

- ✓ データスチュワードシップとデータ管理
- ✓ データスチュワードの定義
- ✓ データスチュワードの役割



本コンソーシアムが実施するプログラム概要

- ✓ ウィーン大学データスチュワード養成コース
- ✓ なぜ今、DS型人材育成が必要か
- ✓ 本プログラムで育成するDS型人材
- ✓ 学習の流れ・修了後の到達イメージ
- ✓ 各回プログラム・講師

データ管理とデータスチュワードシップの違い

- ・「データ管理とは異なる。データ管理がデータライフサイクルの各段階における実務的・運用的な活動全般を指すのに対し、データスチュワードシップは、データ管理における責任の割り当てと計画立案を指す。」
- ・「データスチュワードシップとは、研究プロジェクトの前・最中・後において、成果データの利用可能性、再利用可能性、再現可能性を最適化することを目的に、デジタルデータに関するあらゆる行為を責任をもって計画し実行することである。」

※現時点では、国際社会において『data stewardship』と『data management』の適切な使い分けについて合意はない。

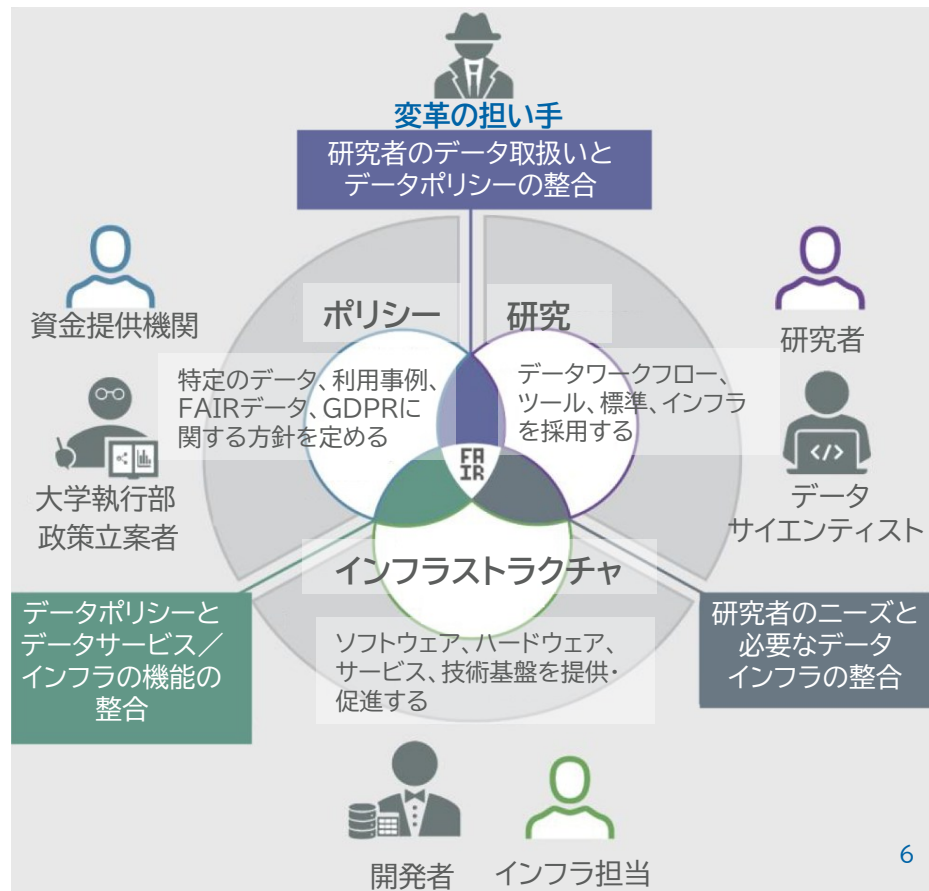
データスチュワードは、研究者のニーズと制度・基盤をつなぐ調整役です

- 「データスチュワードは、… 研究者、政策立案者、ソフトウェア開発者、インフラ提供者(機関内外)を結び付け、コミュニケーションの経路を開くことで、研究者がRDMを成功裏に実践するために必要な要素を整える。FAIRデータ原則の推進者としての役割は、研究者と機関が現代的なRDM実践へ移行するうえで不可欠である。」

Hasani-Mavriqi, I., Reichmann, S., Gruber, A., Jean-Quartier, C., Schranzhofer, H., & Rey Mazón, M. (2022). Data Stewardship in the Making (1.0). [DOI](#)

- 「データスチュワード:適用法令、機関方針、個別の許諾に整合する形で、データおよびメタデータの品質・完全性・アクセス条件を維持する責任を負う人。… 研究サイクルのすべての段階(設計、収集、処理、分析、保存、共有、再利用)で、データが適切に扱われることを保証することを目指す。」

Mijke Jetten, Marjan Grootveld, Annemie Mordant, Mascha Jansen, Margreet Bloemers, Margriet Miedema, & Celia W.G. van Gelder. (2021). Professionalising data stewardship in the Netherlands. Zenodo. [DOI](#)



なぜ、データスチュワードが必要か

研究データをめぐる対応は、研究者個人の努力だけでは完結しにくくなっている。

政策要請の増加

即時OA、DMP、研究データポリシー、FAIR、研究成果公開など、研究データに関する制度的要請が拡大している。

研究現場の複雑化

データの量・形式・保存場所・解析環境が多様化し、分野ごとに公開・共有・保護の判断も異なる。

支援現場の分散

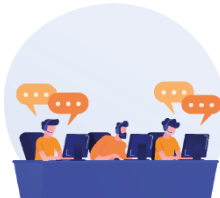
図書館、URA、情報基盤、倫理・法務、研究推進などの支援が分散し、研究者が相談先を見つけにくい。

だからこそ、政策・倫理・技術・分野知識・学内支援資源を結び付ける人材が必要である。

- モデル1:
データスチュワード窓口



- モデル2:
データスチュワード室



- モデル3:
データスチュワード・ネットワーク



海外では、データスチュワードが
専門職として募集されています

Uni Graz: Job Portal

UNIT: INFRASTRUCTURE

Data Steward with focus on metadata and research support (m/f/d)

Application deadline: 04.03.2026

Salary Category: IVa

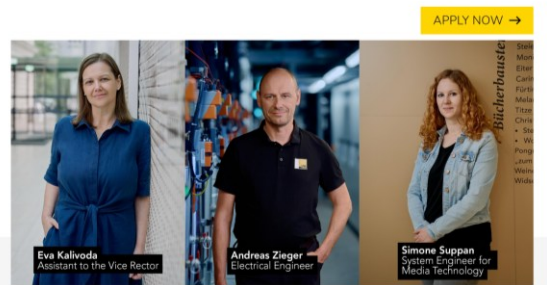
Salary per Year (Full Time): € 48,304.20

Employment Start: As soon as possible

Hours per week: 40 h/w

Duration of Contract: Temporary employment with option for permanent position

Temporary Employment: 1 year



メタデータおよび研究支援を重点とするデータスチュワード
(m/f/d)

応募締切：2026年3月4日

給与区分: Iva

給与(フルタイムの場合): 年額 48,304.20ユーロ

雇用開始日：可能な限り早期

週勤務時間：40時間

契約形態：常勤雇用。無期雇用への転換可能性あり

有期雇用期間：1年

Your Responsibilities

- You will ensure compliance with the RDM policy and liaise with the Data Governance Committee and various data-related bodies
- You support researchers in the use of our research data infrastructure (e.g. FDM repository, central metadata catalogue) and work closely with various internal university stakeholders
- You will work with data managers (e.g. data stewards) from different departments, harmonise metadata standards and ensure central quality assurance
- You are responsible for creating and maintaining technical, thematic and project-specific metadata and ensuring its consistency and quality
- You will bring together data from various centralised and decentralised sources in a structured manner, prepare it and build and maintain efficient data pipelines; in doing so, you will work closely with the System Engineer Research Data - Infrastructure and Data Management
- You will develop training courses and guidelines for professional research data management
- You create reports on the use of resources, analyse them and optimise the use of existing resources

主な職務内容

- ・ 研究データ管理(RDM)方針の遵守を確保し、データガバナンス委員会および各種データ関連組織との**連絡・調整を行う**。
- ・ 研究データ基盤の利用について研究者を支援する。対象には、FDMリポジトリや中央メタデータカタログなどが含まれ、**学内のさまざまな関係者と密接に連携する**。
- ・ データマネージャー、すなわち**各部局のデータスチュワードと協働し**、メタデータ標準の調和を図り、中央での品質保証を行う。
- ・ 技術的・主題別・プロジェクト別のメタデータの作成・維持、およびその一貫性と品質の確保を担当する。
- ・ 集中型および分散型のさまざまな情報源からデータを収集し、構造化された形でまとめ、**データパイプラインを構築・維持する**。また、データを効果的に利用できるようにする。さらに、**研究データ・インフラストラクチャーおよびデータ管理担当のシステムエンジニアと密接に連携する**。
- ・ 教員やガイドライン策定に関わる同僚に対するトレーニングコースやガイドラインを作成する。
- ・ 資源の利用状況に関する報告書を作成し、分析を行い、**既存資源の活用を最適化する**。

Your Profile

- You have completed a technical or comparable qualification (university of applied sciences, university) or are about to complete a suitable qualification
- Completed training in the field of data stewardship is desirable.
- You have experience in the creation and maintenance of metadata and in data management
- You have knowledge of processing, analysing and presenting data, ideally in a scientific environment
- You have programming skills (e.g. Python and R), experience with structured data formats such as XML or JSON and are familiar with Git
- You speak German and English very well
- You are interested in modern technologies and enjoy working in a team
- You are characterised by a willingness to learn, independence, solution orientation and reliability

We offer an annual gross salary of at least € 48,304.20 for a fulltime position. An overpayment based on qualification and experience is possible.

求める人物像・応募要件

- ・ 技術系または同等の資格を有していること。大学または応用科学大学での資格、あるいは適切な資格取得の見込みがあること。
- ・ データスチュワードシップ分野での研修を修了していることが望ましい。
- ・ メタデータ作成およびデータ管理に関する経験を有すること。
- ・ データの処理・分析・提示に関する知識を有すること。科学的環境での経験があれば望ましい。
- ・ プログラミング能力を有すること。例: Python、R。また、XMLやJSONなどの構造化データ形式の経験があり、Gitに慣れていること。
- ・ ドイツ語および英語を非常に良く使えること。
- ・ 最新技術に関心があり、チームで働くことを好むこと。
- ・ 学習意欲、自立性、課題解決志向、信頼性を備えていること。
- ・ フルタイム職の場合、年間総支給額として少なくとも48,304.20ユーロ が支給されます。資格や経験に応じて、これを上回る給与も可能。

欧州では、多様な職種がデータスチュワードを学んでいます ウィーン大学 Data Steward Certificate Course(2023-2024)

参加国

欧州(オーストリア、リトアニア、ポーランド、ベルギー、スイス、チェコ共和国、アイルランド、イタリア、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー)
+アメリカ合衆国+日本 計26名

参加者職種

Research consultant, RDM consulter, Researcher, Lecturer, Librarian, Data Librarian, Data Steward, PhD student, Repository manager, Data manager, OR Support Unit Lead, Bioinformatician, RDM and RDP Coordinator, Research coordinator, Research midwife, Data scientist, 3D lab Operator, Archivist



Course Dates

Module 1: In Vienna

- 4-8 lessons per day
- 1 lesson = 45 minutes
- Start: Monday 10 am
- End: Friday 12.30 pm

Modules 2-4: Online

- 6-8 lessons per day
- 1 lesson = 45 minutes

Attendance is mandatory
80 % per module!

Date	Module	Location
14.-18.10.2024	Module 1: Basics of Research Data Management and Open Science	in Vienna
14.-15.11.2024 12.-13.12.2024	Module 2: Basics of IT and Data Science	online
16.-17.01.2025 13.-14.02.2025 13.-14.03.2025 10.-11.04.2025	Module 3: FAIR Research Data in the Life Cycle	online
15.-16.05.2025	Module 4: Research Data Management Support	online
May-July 2025	Module 5: Data Stewardship in Practice: Project Work	online

[https://www.postgraduatecenter.at/fileadmin/user_upload/pgc/1 Weiterbildungsprogramme/Data Steward/Downloads/Certificate Program Data Steward Uni Vienna 20240418.pdf](https://www.postgraduatecenter.at/fileadmin/user_upload/pgc/1>Weiterbildungsprogramme/Data Steward/Downloads/Certificate Program Data Steward Uni Vienna 20240418.pdf)

各モジュールの講義・ディスカッション

Module 1 : Basics of RDM and Open Science

10月~

- 1.1 Introduction to RDM and Open Science
- 1.2 Role of Data Stewards at Research Institutions
- 1.3 Legal Framework of RDM and Open Science
- 1.4 Responsible Research Practices: Ethics and Integrity
- 1.5 Financing Models, Cost Estimation and Budgeting

Module2 : Basics of IT and Data Science

11月~1月

- 2.1 Introduction to Data Science and Data-Driven Research
- 2.2 Introduction to Machine Learning
- 2.3 Database Systems
- 2.4 Programming Basics
- 2.5 Unix Shell
- 2.6 Version Control with Git and GitLab/GitHub
- 2.7 Programming with Python

Module3 : FAIR Research Data in the Life Cycle

2月~4月

- 3.1 Project Management and the Research Funding Landscape
- 3.2 Data Management Plans and DMP Tools
- 3.3 Organizing and Structuring Data
- 3.4 Processing and Cleansing Data
- 3.5 Metadata and Documentation for Research Data
- 3.6 Repository Management and Long Term Preservation

- 3.7 Data Security, Storage Media and Storage Systems
- 3.8 Data Analysis and Visualization
- 3.9 Semantic Web, Ontologies, Linked Open Data
- 3.10 Interoperability und Data Migration
- 3.11 Persistent Identifiers
- 3.12 Reuse incl. Legal Aspects
- 3.13 Data Stewardship in the Social Sciences
- 3.14 Data Stewardship in the Humanities
- 3.15 Data Stewardship in the Natural and Life Sciences
- 3.16 Data Stewardship in the Technical Sciences

5月~6月

Module4 : Research Data Management Support

- 4.1 RDM Support and Services 1
- 4.2 Teaching Basics, Knowledge Transfer, OER
- 4.3 RDM Teaching and Training in practice
- 4.4 Needs Assessment
- 4.5 Requirements Engineering
- 4.6 RDM Support and Services (Advising) 2

6月~8月

Module5 : Data Stewardship in Practice - Project Work

正解ではなく「判断の型」を共有する

様々な職種と連携して解を導き出す

① 仮想研究プロジェクトの課題：保存・共有・公開・再利用の支援方針を作る

気候変動がサンゴ礁に与える影響を調査する研究プロジェクト。水温・水質・サンゴ健康状態などを複数地点で収集し、形式・保存場所がばらばら。研究者の相談内容を読み解き、研究データライフサイクル全体の支援案を検討。

② 匿名化・機微データ：直接/間接識別子・文脈情報から再識別リスクと潜在的被害を評価する

社会調査で得られたインタビュー記録。氏名を消すだけでなく、所属、地域、職位、出来事の組合せから個人が特定される可能性を検討する。研究価値と個人情報保護のバランスを見ながら、匿名化・共有方法の支援方針を考える。

③ FAIRness評価：公開データセットを比較し、PID・メタデータ・文書化・リポジトリ選択を確認する

公開済みデータセットやリポジトリを比較し、PID、メタデータ、説明資料、ライセンス、ファイル形式などからFAIRnessを評価する。第三者が本当に見つけ、理解し、再利用できるかという観点で評価を行う。

① RDM支援設計: 仮想研究プロジェクトの課題を整理し、保存・共有・公開・再利用の支援方針を作る

気候変動がサンゴ礁に与える影響を調査する研究プロジェクト。水温・水質・サンゴ健康状態などを複数地点で収集し、形式・保存場所がばらばら。研究者の相談内容を読み解き、研究データライフサイクル全体の支援案を検討。

議論する観点

- ・データ統合: 異なる形式・測定地点・機器由来のデータをどう統合するか
- ・アクセス制御: 共同研究者・外部協力者・公開対象で権限をどう分けるか
- ・バックアップ: 「同じ場所のコピー」はバックアップではない
- ・メタデータ: 採取地点、時刻、測定方法、履歴、単位、品質情報をどう残すか
- ・標準化・公開: 標準形式、リポジトリ、ライセンス、再利用条件をどう検討するか

項目	回答例・確認ポイント
データ把握	水温・水質・サンゴ健康状態など、取得する観測データの種類、地点、日時、機器、担当者、測定条件を記録する。後から統合・比較できるよう、単位や時刻の基準をそろえる。
保存・バックアップ	活動中データは学内共有基盤で管理し、加工前データと加工後データを分けて保存する。共同研究者用データと保存用マスターを区別し、別媒体・別場所に定期バックアップする。
共有・権限管理	共同研究者、外部協力者、学生などの役割に応じてアクセス権限を分ける。誰が、いつ、どこまで使えるかを明確にし、契約や提供元の条件を確認する。
メタデータ	地点、日時、機器、単位、測定条件、処理履歴等を記録し、再利用者が測定文脈を理解できるようREADME等を作成。
公開	公開可能なデータを標準形式に整え、README、メタデータ、DOI、ライセンス、引用方法を付けて公開する。機微情報や制約のあるデータは公開不可または制限公開とする。
連携先	IT基盤、契約・倫理担当、リポジトリ担当など、内容に応じて専門部署へつなぐ。DSは相談内容を整理し、適切な連携先を判断。
確認事項	データ容量、増加見込み、機器固有形式、共同研究契約、提供元制約、公開時期、公開範囲、標準メタデータや分野リポジトリの有無を初回相談で確認する。

② 機微データ:直接識別子・間接識別子・文脈情報から再識別リスクと潜在的被害を評価する

社会調査で得られたインタビュー記録。氏名を消すだけでなく、所属、地域、職位、出来事の組合せから個人が特定される可能性を検討する。研究価値と個人情報保護のバランスを見ながら、匿名化・共有方法の支援方針を考える。

議論する観点

- ・ 直接識別子:氏名、住所、連絡先、所属などをどう扱うか
- ・ 間接識別子:地域、年齢、職位、特定出来事の組合せによる再識別リスク
- ・ 文脈情報:誰が追加情報を持ちうるか、どこまで一般化すべきか
- ・ 研究価値:情報を削りすぎると何が失われるか
- ・ 共有条件:公開、限定共有、アクセス申請付き共有のどれが適切か

匿名化は「削る作業」ではなく、研究価値を残しながら識別リスクと潜在的被害を下げる設計

判断観点	対応する処理	具体例
個人を直接特定できる情報を除く	氏名、メール、電話番号、住所、学籍番号・職員番号などは削除・置換・仮名化する	氏名、職員番号、メールアドレスを削除する
組合せで特定されやすい情報を粗くする	所属、職位、学校名、研究室名、地域、日付、年齢などを一般化する	・ 「大阪大学D3センターの准教授」→「関西地方の国立大学の研究支援職」 ・ 「2023年6月12日にB高校で起きた事件」→「2023年頃に学校で起きた出来事」
機微性の高い情報は慎重に扱う	健康情報、家族情報、希少疾患、被害経験などは大きく一般化するか、非公開を検討する	・ 「祖父が認知症で、私が〇〇市の介護サービスを利用している」→「家族の介護経験」または非公開 ・ 「希少疾患名+地域+年齢」→「疾患カテゴリ+広域地域+年代」
分析に必要な情報は最小限の形で保持する	研究目的に不可欠な属性は、年代・広域地域・カテゴリなどに変換して保持する	・ 年齢が必要な場合:「42歳」→「40代」 ・ 地域が必要な場合:「A市」→「関西地方」
公開・共有前に条件を確認する	同意、倫理審査、二次利用、公開範囲、アクセス制限、利用申請の可否を確認する	・ 同意文書に二次利用・公開の記載があるか確認する ・ 必要に応じて制限公開・申請制にする

③ FAIRness評価:公開データセットを比較し、PID・メタデータ・文書化・リポジトリ選択を確認する

公開済みデータセットやリポジトリを比較し、PID、メタデータ、説明資料、ライセンス、ファイル形式などからFAIRnessを評価する。第三者が本当に見つけ、理解し、再利用できるかという観点で評価を行う。

議論する観点

- Findable: PID、検索性、メタデータの充実度
- Accessible: アクセス条件、ライセンス、取得しやすさ
- Interoperable: 標準形式、語彙、メタデータスキーマ
- Reusable: README、変数説明、品質情報、引用方法
- リポジトリ選択: 汎用リポジトリと分野別リポジトリの違い

- 「公開されている」だけではFAIRとは言えない
- 再利用者がデータの意味・作成方法・利用条件を理解できるか
- DMP段階から公開先・形式・メタデータを設計する必要がある

観点	確認すること	望ましい状態	注意が必要な状態	支援者の助言	公開先選択での見方
Findable 見つけやすさ	データの内容、作成者、関連情報を検索・識別できるか	DOI、著者、機関、助成情報、キーワードが記載されている	タイトルだけで内容が分からず、識別子やキーワードも不足している	DOIの付与、メタデータの補完、研究課題・論文との紐づけを行う	汎用リポジトリは公開・引用しやすい。一方で、分野用語や専門的なメタデータは不足しやすい
Accessible アクセスしやすさ	誰が、どの条件で、どのようにデータを取得できるか	取得方法、アクセス条件、問い合わせ先が明記されている	ログインや申請が必要だが、その理由や手順が分かりにくい	アクセス条件、制限理由、申請手順を明記する	制限付き公開でも、条件と手順が明確であれば利用者は判断しやすい
Interoperable 組み合わせやすさ	他のデータやシステムと合わせて使えるか	標準形式で保存され、語彙・単位・変数名が説明されている	独自形式のみで、変数名・単位・コードの意味が分からない	標準形式、コード表、単位、スキーマを追加する	分野標準がある場合は、分野別リポジトリの方が再利用に適していることがある
Reusable 再利用しやすさ	第三者がデータの意味や利用条件を理解できるか	README、測定方法、ライセンス、引用方法、品質情報がある	ライセンスや前処理が不明で、再現・再利用に必要な情報が不足している	README、データ辞書、ライセンス、処理コードを追加する	分野別リポジトリは再利用性を高めやすいが、登録準備の負担もある

本プログラムで育成するDS型人材

研究データライフサイクル全体を見通し、各段階で必要となる支援内容や関係部署の役割を整理したうえで、研究者と支援職員をつなぎ、RDMの実践を支援できる人材。

研究者の困りごと

相談先が分からない

DMP、OA、公開可否、保存先、倫理審査などが別々の窓口に見える。

判断材料が不足する

分野差、個人情報、権利、二次利用、データ品質などを総合的に判断しづらい。

作業負担が増える

制度対応、メタデータ作成、公開手続、データ整理が研究活動に上乗せされる。



支援現場の困りごと

知識が部門別に分かれる

制度、倫理、技術、分野知識が分散し、相談対応が属人的になりやすい。

共通言語が不足する

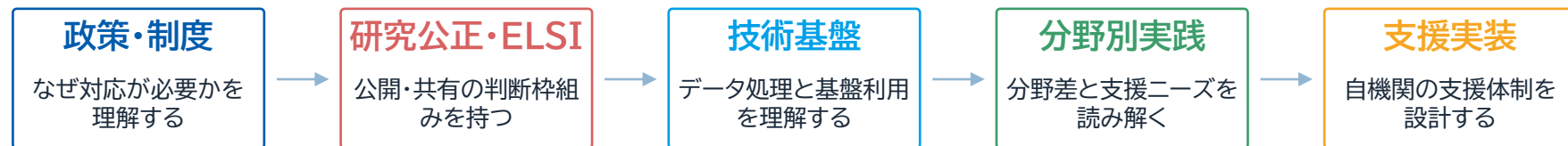
研究者のニーズを支援部門の言葉に翻訳する仕組みが弱い。

継続的な育成が必要

単発の説明会ではなく、事例・教材・ネットワークを共有する場が必要である。

「一人で全てを解決する人材」ではなく、「適切な人・制度・基盤につなぐ人材」を育成する。

政策・倫理・技術・分野実践を段階的に学びます



知識習得 → 判断枠組み → 技術理解 → 分野理解 → 支援設計、という段階的な構成である。

修了後の到達イメージ

修了時には、次の4つを自機関の文脈で説明・設計できる状態を目指す。

相談対応

研究者の相談を受け止め、DMP、OA、保存、公開可否、倫理、基盤利用の論点を切り分ける。

支援先整理

図書館、URA、情報基盤、倫理・法務、研究推進など、関係部署の役割を整理する。

研修設計

研究者・支援者に必要なRDM研修や教材を企画し、学内展開の入口をつくる。

体制構想

自機関の資源と課題を踏まえ、実現可能なRDM支援ワークフローを構想する。

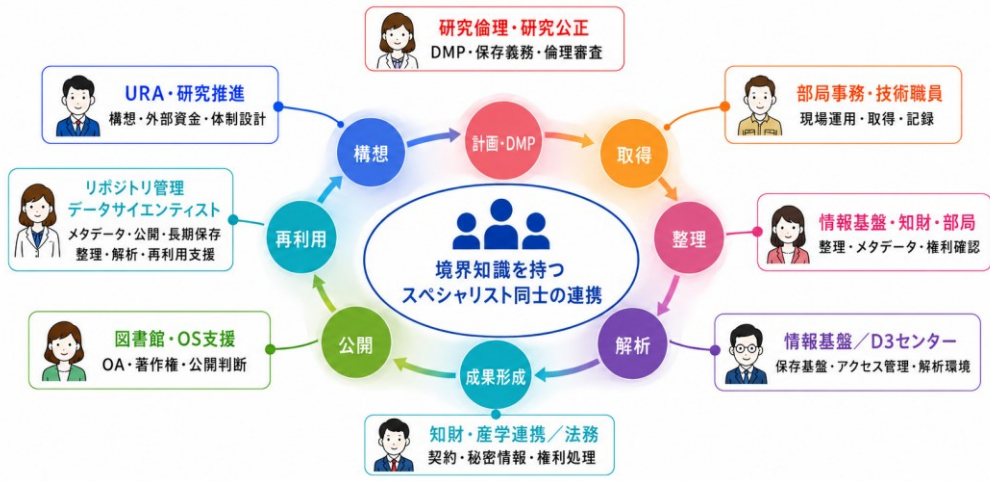
研究データライフサイクルにおける人材育成の2つのアプローチ

アプローチ①：ジェネラリスト型DSの育成

研究データライフサイクルの全体を理解し、
各フェーズを横断的に対応できるジェネラリストを育成



アプローチ②：データライフサイクルをつなぐ隣接領域スペシャリストの連携



特徴

- ライフサイクル全体を俯瞰できる
- 柔軟な対応が可能
- 組織横断的な役割を担える
- 職種や役割の縦割りが存在
- 受講後にすぐにジェネラリストとして活躍できるとは限らない
- 各機関での受け入れ基盤が未整備

課題(日本の実態)

特徴

- 専門性を維持しながら視野を拡張
- 隣接フェーズの境界で協業が生まれる
- 小さな連携の積み重ねでサイクル全体が回る
- フェーズ間の溝を埋める
- コミュニケーションが円滑に
- 手戻りやミスの軽減
- 研究データの価値最大化

期待される効果

ジェネラリストの育成と並行して、隣接領域をつなぐスペシャリストのネットワークを構築することで、
日本の研究データ環境に適した、持続可能なライフサイクルの実現を目指す

プログラム・講師

2026.8.25

2026.9.18

2026.10.27

2026.11.10

2027.1

2027.2

国際動向・政策



研究公正・ELSI



解析・技術基盤 (データ処理)



分野別実践 (デジタル・ヒューマニ ティーズ:DH)



分野別実践 (口腔医療情報・ スマート農業)



データスチュワード型 支援の設計と実践



ウィーン大学データスチュワード養成コースとの対応関係

I 制度・倫理・資金計画
(RDM基礎知識)

II IT・データ基盤リテラシー
(技術的基礎知識)

III ライフサイクル管理
(FAIR原則と実装)

IV 支援設計・ニーズ分析・教育設
(RDM支援の構築)
V プロジェクト型実践(統合演習)

参加証明書の発行

関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム

KANSAI RDM Human Resource Development Consortium

データスチュワード型人材育成プログラム

参加証明書

氏 名： _____ 様

上記の者は、関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアムが実施する
データスチュワード型人材育成プログラムに参加し、
下記のセッションを受講したことを証明します。

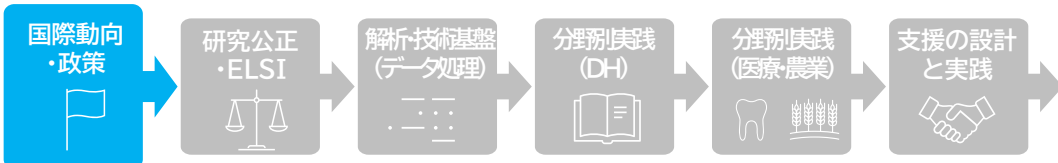
参加セッション

- ☐ 歴史と現在の政策から見るデータ管理
- ☐ 研究公正・倫理的・法的・社会的課題（ELSI）
- ☐ 解析・技術基盤（データ処理）
- ☐ 分野別実践（デジタルヒューマニティーズ：DH）
- ☐ 分野別実践（医療データ／農業データ）
- ☐ データスチュワード型支援の設計と実践

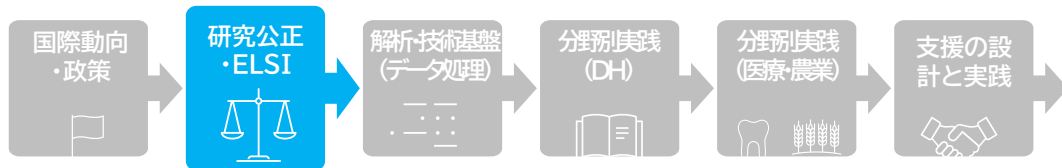


発行日： 年 月 日

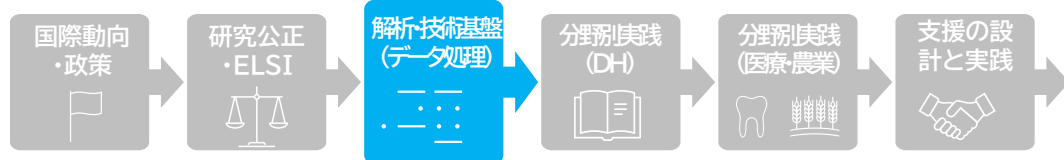
関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム会長
(大阪大学 理事・副学長)



講義	概要(予定)	到達目標
データスチュワードの役割  大阪大学 D3センター 甲斐	データスチュワードとは何か、RDMとデータスチュワードシップの違い、研究者・図書館・URA・情報基盤・法務/倫理担当をつなぐ役割を説明する。あわせて、本プログラムが目指す「研究データライフサイクル全体を見通し、研究者と支援職員をつなぐ人材」の位置づけを示す。	受講者は、DSの基本的役割を説明できる。研究者のニーズを把握し、政策・倫理・技術・支援サービスをつなぐ橋渡し人材として、自身が担いうる役割を具体的に整理できる。
社会基盤としてのデータ管理  大阪大学 人文学研究科 古谷教授	「情報国家」の視点に基づき、RDMを単なる研究支援実務ではなく、国家・社会・大学の知的インフラとして位置づける。記録やデータが、意思決定、透明性、説明責任、民主主義、倫理と関わることを、北欧の情報管理・記録管理の歴史を通じて考える。	受講者は、RDMを個別研究の管理実務にとどめず、大学・社会・国家の知的基盤として説明できる。DSが、研究データの管理を通じて、透明性・説明責任・知識継承を支える役割を担うことを理解できる。
国際動向・政策  京都大学 附属図書館 沼尻助教	日本におけるオープンサイエンス、即時OA、DMP、機関リポジトリ、研究データ基盤をめぐる政策動向を整理するとともに、これらが研究評価改革とどのように関係するかを扱う。研究支援部門が制度的要請を現場支援へ落とし込み、研究活動の可視化や公正な評価につなげていくための方策を考える。	受講者は、OS/OA/RDMに関する主要な政策動向を説明できる。さらに、研究者に求められる対応を、図書館・URA・情報基盤・研究支援部門等による具体的な支援に結び付けて整理できる。



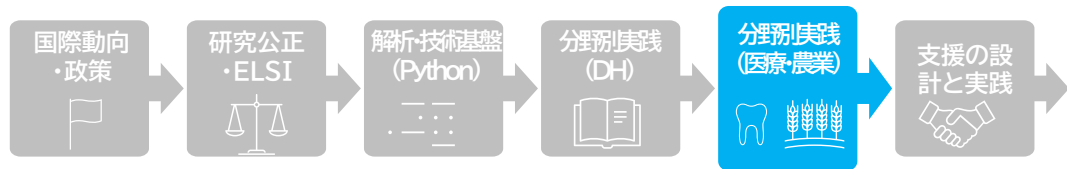
タイトル	概要(予定)	到達目標
研究公正  京都薬科大学 田中教授	研究公正を不正防止に限定せず、研究者がデータ作成者・利用者・著者・共同研究者・公的資金の受領者として負う責任として説明する。オープンサイエンス時代には、透明性、説明責任、再現性、データ管理、公開・再利用、研究インテグリティが相互に関係することを扱う。	受講者は、RDMが責任ある研究実践の基盤であることを説明できる。研究者から相談を受けた際に、データの保存、再現性、公開、再利用、著者性、説明責任に関する基本的な論点を整理できる。
ELSI  阪大ELSIセンター 榎本特任研究員  阪大ELSIセンター 井出特任准教授  阪大ELSIセンター 長門講師	研究データの公開・共有・再利用に伴うELSI上の論点を扱う。個人情報、センシティブデータ、同意、匿名化・仮名化、再識別リスク、倫理審査、二次利用、公開情報の扱いなどを整理し、公開・制限共有・非公開をどう判断するかを事例で考える。	受講者は、研究データの公開・共有に伴う倫理的・法的・社会的論点を説明できる。公開可能かどうかを単純に判断するのではなく、研究対象者、研究者、社会への影響を踏まえて、公開・制限共有・非公開の判断材料を整理できる。



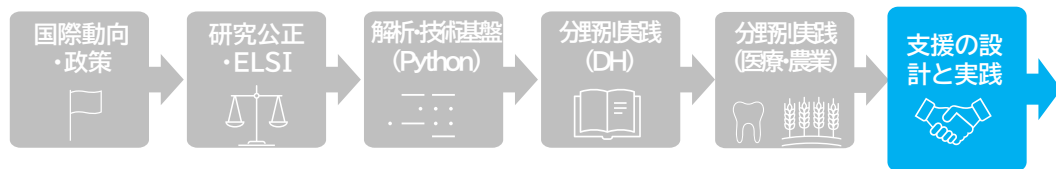
タイトル	概要(予算)	到達目標
テキストデータ処理の基礎  阪大文学部 吉賀准教授	Pythonを用いた研究データ処理の入口として、テキストデータの読み込み、整形、分かち書き、頻度集計、簡単な可視化などを扱う。プログラミングそのものよりも、データを再利用可能な形に整える考え方、ファイル形式、文字コード、前処理、再現可能なスクリプト管理の重要性を説明する。	受講者は、テキストデータを研究データとして整理・加工する基本的な手順を理解できる。データ形式、文字コード、前処理、スクリプト管理の重要性を説明し、再利用可能なデータ整備の観点から研究者を支援できる。
センシティブ画像データの取扱い  岐阜大学 工学部 清野助教	口腔・歯科領域の画像データを例に、センシティブな研究データをPython等で扱う際の実務上の注意点を講義する。画像データの形式、前処理、匿名化・マスキング、メタデータ管理、アクセス制御、保存場所、解析環境、二次利用時のリスクを扱う。	受講者は、画像データを含むセンシティブデータの管理上の注意点を説明できる。技術処理とELSI・データ保護が不可分であることを理解し、匿名化、アクセス制御、保存環境、二次利用リスクを踏まえた支援課題を整理できる。
大規模データ処理と研究データ基盤  滋賀大学 データサイエンス研究科 戸簾氏	大規模データを扱う際の基礎的な考え方として、データ量、処理時間、メモリ制約、分割処理、クラウド・HPC・ストレージ利用、ログ管理、再現性の確保を説明する。単一PCで扱えるデータと基盤利用が必要なデータの違いを扱う。	受講者は、大規模データ処理における技術的制約と基盤利用の必要性を説明できる。研究者のデータ規模や処理要件を把握し、クラウド、HPC、ストレージ、セキュリティを踏まえた適切な支援先につなげられる。



タイトル	概要(予定)	到達目標
分野別実践(デジタル・ヒューマニティーズ:DH) 阪大文学部 吉賀准教授 ベルリン自由大学 Söring氏 ベルリン自由大学 Wagner氏	ウィーン大学の「人文学・社会科学におけるデータスチュワードシップ」に対応させ、テキスト、画像、史資料、Webデータ、聞き取り資料など、人文学特有のデータを扱う。TEI、IIIF、メタデータ、デジタルアーカイブ、権利処理、公開範囲、文脈情報の記述を中心に、FAIR化と再利用可能性をどう支えるかを扱う。	受講者は、人文学・社会科学データの多様性と文脈依存性を説明できる。TEI、IIIF、メタデータ、権利処理、公開範囲、文脈情報の記述を踏まえ、分野特性に応じたFAIR化・再利用支援の観点を整理できる。



タイトル	概要(予定)	到達目標
分野別実践(医療データ／口腔医療情報)  阪大 歯学部附属病院 野崎准教授	医療・歯学領域における臨床データ、画像データ、検査・測定データの取扱いを扱う。個人情報・要配慮情報を含む可能性のあるデータについて、取得、保存、匿名化、アクセス制御、倫理審査、二次利用、公開・共有可否の判断を、実際の研究・病院現場に即して講義する。	受講者は、医療・歯学領域の研究データに特有の倫理的・法的・技術的課題を説明できる。臨床現場や病院環境に即して、データ取得、保存、匿名化、アクセス制御、倫理審査、二次利用、公開可否の判断に必要な観点を整理できる。
分野別実践(農業データ/スマート農業)  日本国際学園大学 丸山助教	農業・スマートフードチェーンにおけるセンサー、圃場、流通、環境、機器ログなどの多様なデータを扱う。データの収集、標準化、品質管理、共有、利活用、産学官連携、データガバナンスの課題を整理し、実社会に接続する研究データの管理・活用を事例中心に扱う。	受講者は、農業・スマートフードチェーンにおける多様なデータの特徴と管理課題を説明できる。標準化、品質管理、共有、利活用、産学官連携、データガバナンスの観点から、実社会に接続する研究データ支援のあり方を整理できる。



タイトル	概要(予定)	到達目標
データスチュワード型支援の設計と実践  アイントホー フェン工科大 角南氏  広島大学 平田シニアURA  阪大D3センター 甲斐	研究者の相談対応、DMP支援、研修設計、関係部署との調整、ニーズ把握、支援ワークフロー、学内ネットワーク形成を扱い、自機関でどのようなRDM支援体制を構築するかを考える。	受講者は、研究者のニーズを把握し、DMP支援、相談対応、研修設計、関係部署との連携を含むRDM支援ワークフローを設計できる。自機関の資源や課題を踏まえ、実現可能なRDM支援体制を構想できる。

一機関・一職種だけで抱えず、ともにRDM支援を育てませんか

関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアムは、
RDM支援を「学ぶ・共有する・つながる」場です。

学ぶ

政策・倫理・技術・分野実践を
段階的に学ぶ

共有する

教材・事例・相談対応の
実践知を持ち寄る

つながる

支援者同士をつなぎ、
各機関の支援体制へ活かす

所属機関でのコンソーシアム加入と、研修プログラムへの参加をご検討ください。

関西地区以外の機関からの加入・参加も歓迎します